



研究用試薬

## ヒストファイン

第一抗体

抗サイクリンD1ウサギモノクローナル抗体(SP4)(ヒストステイナー用)

(動物種:ウサギ)

包装: 60テスト(12mL)

Code: 713521

製造販売元

株式会社ニチレイバイオサイエンス

〒104-8402

東京都中央区築地6-19-20

TEL. 03(3248)2208 FAX. 03(3248)2243

■本品は、自動染色装置ヒストステイナー用の試薬 第一抗体である。

■特異性および抗原分布:ヒトサイクリンD1(PRAD-1又は*bcl1*)に反応する。サイクリンD1はサイクリンD2、D3を含めた細胞周期制御タンパクの1つで、11番染色体長腕13領域上にある癌遺伝子PRAD1(CCND1)にコードされている36kDaの核内タンパクである。D型サイクリンは、サイクリン依存性キナーゼ(Cyclin-Dependent kinases) Cdk4とCdk6と複合体を形成し、Rbタンパクをリン酸化することにより細胞周期をG1期からS期へ移行させる。マントル細胞リンパ腫、乳癌を含むヒトの悪性腫瘍において、サイクリンD1の過剰発現がみられる。

■クローン名: SP4

■抗体のサブクラス: ウサギ IgG

■免疫原: ヒトサイクリンD1のC末端の合成ペプチド

■由来: ハイブリドーマの培養上清より得ている。

## 1. 内容

第一抗体・・・抗サイクリンD1ウサギモノクローナル抗体(SP4)(動物種:ウサギ)。

液状。

ウシ血清アルブミン(BSA)と0.1%アジ化ナトリウムを含むリン酸緩衝生理食塩水(PBS)にて、即時使用可能な抗体濃度に希釈済み。

1バイアル中に12mLを含む。

## 2. 使用目的

組織・細胞中のヒトサイクリンD1の染色。

## 3. 切片の準備

前処理(抗原賦活化)としてヒストファイン 抗原賦活化液 pH9 (10倍濃縮)(Code:415211)またはヒストファイン 抗原賦活化液 pH9 (調製済)(Code:415201)を用いたオートクレーブ処理が必要である(裏面参照)。

■参考: 組織の固定状況等によりヒストファイン 抗原賦活化液 pH9 (10倍濃縮)(Code:415211)またはヒストファイン 抗原賦活化液 pH9 (調製済)(Code:415201)の代わりに10mMクエン酸緩衝液(pH6.0)を用いたオートクレーブ処理をすることで、良好な染色結果が得られる場合がある。

## 4. 使用方法

1) 他の試薬とともに試薬ラック(ヒストステイナー用)にセットし、染色を開始する。

2) 染色終了後、すみやかに2-8℃に保存する。

## 5. 染色方法の設定

反応時間を30分間とする。

## 6. 貯法

2-8℃保存。

## 7. 使用上又は取扱上の注意

ヒト由来の検体は、取扱者に感染をひき起こす危険性がある。従って、適切な取扱および廃棄法を用いるとともに、この免疫組織(細胞)化学染色法を施行するに際し、関連技術および操作法に充分習熟しておかなければならない。

試薬バーコードラベルを使用する場合は、自動染色装置ヒストステイナーのプログラムにバーコードラベル情報を入力する必要がある。本製品が未登録の場合は、下記データを入力(漢字のみ全角、他半角入力)し、登録すること。

専用ボトルに貼付されているバーコードラベル内の情報

試薬名	抗サイクリンD1ウサギモノクローナル抗体(SP4)
試薬略称(10文字)	Cyc-D1-RM
バーコード	Cyc-D1-RM
時間(分)	30

## 8. 主要文献

(1) Cheuk, W. et al: Am J Surg Pathol June 2004 Vol. 28(6):801-7

■研究用としてのみ使用すること。

### ■切片の準備

- 50℃で十分に湯伸ばしした切片(3-4μm厚)をシランなどのコーティングスライド上に張り付け、37℃の恒温器内で16時間以上乾燥させる。
- 脱パラフィン → 親水化 → PBS
- 前処理(抗原賦活化): オートクレーブ処理
  - ①抗原賦活化液pH9を耐熱性バットに入れ、切片を浸す。
  - ②バットに蓋をする。蓋が取れないように輪ゴムでとめる。
  - ③120℃、20分間オートクレーブ処理する。
  - ④圧力が十分下がった後、バットごと切片を取り出す。
  - ⑤バットの蓋をはずし、バットごと切片を常温に20分以上放置し、ゆっくり熱を冷ます。  
※オートクレーブ処理後は、バットおよび抗原賦活化液pH9等が高温になっている。これらを取り扱う際は、手袋等を使用し火傷に注意する。
  - ⑥スライドを抗原賦活化液pH9から取り出し、PBSまたはバッファーでよくすすぐ(3分間ずつ容器を2度かえるか、または洗浄ピンを使用する)。

### ・抗原賦活化液pH9の作り方

- ・ Code : 415201 抗原賦活化液pH9 (調製済)は、そのまま用いる。
- ・ Code : 415211 抗原賦活化液pH9 (10倍濃縮)は、精製水で10倍希釈する。

■参考: 10mMクエン酸緩衝液(pH6.0)を用いたオートクレーブ処理の場合  
(おもて面の■参考参照)

### ・ 10mMクエン酸緩衝液(pH6.0)の作り方

A液9mL+B液41mL+精製水450mL

A液: 0.1Mクエン酸水溶液

クエン酸一水和物(C<sub>6</sub>H<sub>5</sub>O<sub>7</sub> · H<sub>2</sub>O)2.1g/精製水 100mL

B液: 0.1Mクエン酸ナトリウム水溶液

クエン酸三ナトリウム二水和物(C<sub>6</sub>H<sub>5</sub>O<sub>7</sub>Na<sub>3</sub> · 2H<sub>2</sub>O)14.7g/精製水 500mL

A液、B液は常温で保存可能である。ここから必要な時に調製する。